

完了報告書

日本財団 会長 笹川 陽平 殿

報告日付: 2022年4月15日

事業ID: 2020554990

事業名: 佐賀県唐津市における
「子ども第三の居場所」の運営(最終年度)

団体名: 特定非営利活動法人 博心館

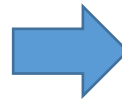
事業完了日: 2022年3月31日

1. 事業内容

■ 事業内容1

(1) 助成契約書記載の事業内容(予定)

1. 佐賀県唐津市における「子ども第三の居場所」の運営
(1) 期間: 2021年4月1日～2022年3月31日(週6日、14時から19時まで開所)
(2) 場所: 佐賀県唐津市
(3) 対象: 家庭や自身に課題を抱えた小学校低学年を中心に15名
(4) 内容: 「第三の居場所」をつくり、子どもとの1対1の関係を重視しながら、子どもたちの生活習慣形成や学ぶ意欲向上を支援することで社会的相続を補完する。農業体験や地域の方々に指導してもらう習字や英会話を通じて、子どもに多様な経験を提供する。



(2) 事業完了時の事業内容(実績)

1. 佐賀県唐津市における「子ども第三の居場所」の運営
(1) 期間: 2021年4月1日～2022年3月31日(週6日開所。月～金14時から19時迄。土曜・学校休業時7時半～19時迄)
(2) 場所: 佐賀県唐津市
(3) 対象: 家庭や自身に課題を抱えた小学校低学年を中心に生活保護世帯・児童扶養手当受給世帯の児童26名が登録した。また、児童の下校時に親がいない(共働き)世帯の児童、35名程の利用(有償)があった。
(4) 内容: 「第三の居場所」をつくり、子どもとの1対1の関係を重視しながら、子どもたちの生活習慣形成や学ぶ意欲向上を支援し、社会的相続を補完できた。農業体験や地域の方々に指導してもらう習字や英会話を通じて、子どもに多様な経験を提供できた。

(3) 成功したこととその要因

新型コロナウイルス感染症の流行が収まらない中、日々の検温・手洗い・消毒・空間除菌をはじめ感染症予防対策が実行でき、当団体からクラスター発生は無かった。活動が制限されるなかで、あらたな体験機会の提供をめざし、山登りやデイキャンプ料理教室などを開催し子ども達に多様な経験を提供できた。

(4) 失敗したこととその要因

課題感のある児童の対応に対しては学校、市・子育て支援課と連絡を取りながら対応に当たった。途中、博心館との関係が切れてしまう児童はいなかったが、保護者との十分な関係構築には至らず、今後は家庭の子育て環境を含めて改善を指導するスタッフのスキル向上が要求される。

(5) 事業内容詳細

1. 佐賀県唐津市における「子ども第三の居場所」の運営
(1) 期間: 2021年4月1日～2022年3月31日(週6日開所。月～金14時から19時迄。土曜・学校休業時7時半～19時迄)
新型コロナウイルス感染症蔓延防止期間中も利用希望があり開所した。
(2) 場所: 佐賀県唐津市
(3) 対象: 家庭や自身に課題を抱えた小学校低学年を中心に生活保護世帯・児童扶養手当受給世帯の26名の児童が登録した。また、児童の下校時に親がいない(共働き)世帯の児童、35名程の利用(有償)があった。
募集には、地元幼保施設やスイミングなどの習い事施設を中心に塾の広報を行った。また行政や小学校とも連携し、対象者へ当施設をご紹介いただいた。児童クラブの選考に漏れたり、児童クラブから移ってきた家庭からの申し込みも数件あり、来年度利用分も申し込みがあっている
(4) 内容: 「第三の居場所」をつくり、子どもとの1対1の関係を重視しながら、子どもたちの生活習慣形成や学ぶ意欲向上を支援し、社会的相続を補完できた。
農業体験や地域の方々に指導してもらう習字や英会話をはじめ、新型コロナウイルス感染症蔓延防止に努め、プログラム内容を変更したり新規内容で開催するなど子どもに多様な経験を提供できた。

2.契約時事業目標の達成状況:

(1)助成契約書記載の目標

1. 拠点利用児童の募集(2020年10月時点で16名が登録しているところ、2022年度3月末時点で20名とする)
2. 児童への居場所、食事、生活習慣支援、学習支援などの安定的な提供
3. ボランティア等の地域住民や、行政、学校との関係構築
4. 子どもの「経験の不足」を解消するようなイベントを事業期間内に20回実施する

(2)目標の達成状況[700文字以内]

入力文字数	618	文字数チェック	OK
<p>1. 拠点利用児童の募集□ 状況:2022年3月末時点で事業対象児童は26名登録しており、目標達成している。</p> <p>2. 児童への居場所、食事、生活習慣支援、学習支援などの安定的な提供 状況:土曜、学校休業時(長期、臨時含む)に希望する事業対象児童へ無料で食事提供を行った。挨拶、手洗い消毒などの生活習慣支援、宿題指導などの学習支援を毎日安定的に行った。</p> <p>3. ボランティア等の地域住民や、行政、学校との関係構築□ 状況:コロナ禍のため、ボランティアの参加を自粛いただいたこともあった。□ 行政とは、窓口の子ども支援課と日頃より連絡を取り合い、窓口で対象家庭へ当団体をご紹介いただいた。市役所政策部、窓口の子育て支援課と助成金終了後の支援について、協議した。 学校とは、校長先生との情報交換を行っていた。ソーシャルワーカーさんを含めた関係者との会合はコロナ禍の為に中止になっている。□</p> <p>4. 子どもの「経験の不足」を解消するようなイベントを事業期間内に20回実施する□ 状況:農業体験年8回、習字年48回、絵画年30回、英会話年90回、座禅年12回、ヨガ年90回、昆虫飼育年24回以上、合計300回以上をそれぞれ実施した。そのほかコロナ禍の為、社会科見学は計画どおり実行できなかったが、海水浴2回、県立宇宙科学館体験1回を行った。そのほか、感染予防の観点から、音楽教室や映画鑑賞、料理教室、山登り、デイキャンプなど事業内容を再検討しながら行った。</p>			

3.事業実施によって得られた成果

<p>新型コロナウイルス感染症対応として、社会見学だけでなく山登りやディキャンプの屋外プログラムの開発、また音楽教室や料理教室などの室内体験プログラムの開発ができた。山登り、今回初めて行ったディキャンプを通しては、今まで体験したことがなかった「火起こし」「竹飯ごう」を行いながら自然の中で如何に工夫するか、実現するか、子どもなり考える機会を得て、子どもの積極的な行動に繋がった。音楽教室においては大きな声で歌ったり、人の前で踊ったり出来なかった児童が回を重ねながら舞台上に立てるようになり、3月末の発表会には保護者にも参加をして頂き、成長した姿を見せることが出来た。様々な体験を重ねることで、子供達の自己肯定感や周囲との協調性、コミュニケーション能力を育み、非認知能力の向上に寄与出来たと考える。</p> <p>また、年間を登して感染症対策を行うことで、博心館でのクラスター発生を防止することができた。感染症が流行している状況でも、一定数以上の博心館利用希望があり、需要の高さを再認識できた。</p>
--

4.活動を通じて明らかになった新たな課題と対応案

<p>感染症防止対策でのマスク着用や体験活動制限など、子どものストレスが増えているせいか児童の声に対して近隣から騒音クレームがあり、防音工事など追加費用が発生した。日頃からのストレスケアなども重点的に行った。□ また外部の方の施設立ち入りを極力避けるようにし、保護者にも可能な限り玄関外でのお迎え待機をしていただいた。そのための対策として玄関横に雨雪除けのシートを設置した。□ 利用児童数が減少しない中、感染症発生リスク対策に追われた。当施設からの新型コロナウイルスのクラスターを出さないよう、児童対応はもとよりスタッフの健康管理などにも取り組んだ。 新たな変異株も発生し、これにともなう感染防止の為の学校の臨時休業にも対応し、できるかぎり開館した。 今後はコロナ禍における子どもを取り巻く環境変化に留意しながら、当初の目標を達成するため行政、教育機関と協議し対応していくことが必要と考える。</p>
--

5.事業成果物

(1)助成契約書記載の成果物名称

事業完了報告書

(2)事業完了時の成果物名称

事業完了報告書